

月刊 DRF 2015 年 7 月号 No.66 July, 2015 掲載

今そこにあるオープンアクセス Clear and present Open Access

第 13 回 エルゼビア社の新方針をめぐる議論

Discussions about Elsevier's new policy

4 月末に発表された、オープンアクセス(OA)に関するエルゼビア社の[新しい方針](#)は、またもやという感もあるが、激しい反発を引き起こし、[SPARC](#) と [COAR](#) が連名でエルゼビア社に修正を求める[声明](#)を出して、署名を呼びかける騒ぎとなった。署名機関は当初の 23 から 224 にまで増えており (6 月 20 日現在)、わが [DRF](#) や[機関リポジトリ推進委員会](#)も参加している。

新方針の内容については DRF メーリングリスト上でかなり詳しい[説明](#)がなされており、日本語で概要を知ることができる。また、英語になるが、従来の方針との違いを端的に示した[対照表](#)も公開されている。大きな変化は、OA 義務化の有無による区別をなくしたことである。これまでは、義務化されていない機関の研究者は雑誌受理原稿をただちにリポジトリで公開できたが、義務化されている機関ではエンバーゴが課されていた。これをやめて、一律、雑誌ごとに[エンバーゴ期間](#)を定めることとなった。

OA 義務化の有無による区別はかねてから不合理などと批判されており、エルゼビア社としてはルールを明快にしたつもりだったのだろうが、すべての研究者にエンバーゴを課す方向で統一したため、OA 推進論者には後退と映った。雑誌の中には 4 年という長期のエンバーゴを設定しているものもある。さらに、CC-BY-NC-ND (表示、非営利、改変禁止) が条件とされ、二次利用が制限されることも明白になった。デューク大学のケヴィン・スミスはこうした点を[ブログ](#)で痛烈に批判した。上記 COAR の声明も基本的に同じ考え方である。

もちろんエルゼビア社に言わせれば、エンバーゴがないと雑誌が売れなくなり、ビジネスモデルが崩壊するということになるのだが、COAR の声明では、論文原稿の即時公開が予約購読に悪影響を与えるという確たる証拠はないと主張している (この点については、図書館が「われわれは決して購読を中止しない」という誓約への署名活動をすればいいという、冗談とも本気ともつかない[投稿](#)がメーリングリストにあった)。

ややこしいことに、研究者個人のウェブサイトやブログでは、引き続き原稿の即時公開が認められている。[ArXiv](#) や [RePEc](#) に投稿されたプレプリントも査読での修正を反映できる。機関リポジトリでも、一般公開がダメなだけで、学内の利用や、請求に応じて個人的に送付することはエンバーゴ期間中でも構わない。つまり、研究者が自発的、個人的に行う情報共有は禁止していない。しかしながら、[ハーナッド](#)も指摘しているように、そもそも機関のウェブサイト中の研究者個人のホームページと機関リポジトリとを区別することにどれほどの意味があるのか、首をひねらずにはいられない。

非営利や改変禁止という制限を取り去り、CC-BY を求めるという点に関しては、従来から OA 推進論者の間でも意見が分かれている。COAR と SPARC は著者が希望する条件を選べるようにすることを[要求](#)しているが、これに対してハーナッドは、差し当たり CC-BY-NC-ND で十分だとして、エルゼビア社の[擁護](#)に回っている。

6 月半ばを過ぎてもメーリングリスト等での議論は続いている。エルゼビア社も対話の継続は表明しており、エンバーゴ期間の決め方の[説明](#)などもなされた。他社の方針に与える影響も大きいと考えられる。今後の展開に注目したい。